

## 連載 44 『河内山宗俊』 90 周年に寄せて：見出された映画

去る年は原節子（1920 - 2015）没後 10 周年の記念の年だった。寒い季節になると観たくなるのが山中貞雄監督『河内山宗俊』（1936）である。原節子 15 歳の作品。90 年前の映画である。お浪（原節子）の出来ない弟が遊女と心中して、自分だけ生き残る。遊女にかかった金をお浪に身を売ってでも返せと理不尽な親方が迫る。遊女が身を投げた暗い水面の波紋が美しく吸い込まれそうだ。弟のために身売りを覚悟する原節子の表情と、おりから降りしきる雪の白さに惚けてしまう。

『河内山宗俊』（一九三六年）でいつのまにか降りはじめている雪は、映画の歴史でもっとも美しく、もっとも心に浸みる瞬間をかたちづくっている。丹精こめてこまかな雪片を準備した監督の山中貞雄は、そのとき二十六歳。音もなくあたりに舞う雪の淡さをふと目にしてしまう主演女優の原節子は、十五歳でしかない。何という若さだろうか。だが、そのとき、日本の映画の最良の部分は、すでに世界映画の先端部分を疾走していた。「ヌーヴェル・ヴァーグ」は、フランスのそれに二十年先立って、一九三〇年代の中ごろに日本で生まれたのである。（蓮實重彦「まだ十五歳でしかない彼女の伏し目がちなクローズ・アップの途方もない美しさについて — 山中貞雄『河内山宗俊』論」初出『文學界』2016年2月号）

山中貞雄（1909 - 1938）は、『河内山宗俊』の二年後、日中戦争で戦病死した。山中の監督作品のフィルムで現存するものは『丹下左膳余話 百萬両の壺』（1935）、『河内山宗俊』、『人情紙風船』（1937）のわずか三本だけである。いずれも時代劇だが、モダニズムの速度と感情がある。

山中貞雄の戦死を受けて『キネマ旬報』では「山中貞雄を偲ぶ座談会」（1938年10月21日号、清水宏、三村伸太郎、瀧澤英輔、大河内傳次郎、岸松雄、米田治、友田純一郎、水町青磁）を開いた。席上、大河内は「余り偉大な仕事をし続けて短時日で死んで行つた」と惜しんで、沢田正二郎（1892 - 1929）、石川啄木（1886 -



『河内山宗俊』（1936年）

左から：河内山宗俊（河原崎長十郎）、原節子、金子市之丞（中村翫右衛門）

1912)、国木田独歩（1871 - 1908）らの夭折と、山中の死とを並び称した。

前年度の『キネマ旬報』恒例のベストテンでは、飯田心美、板垣鷹穂、池田照勝、菅見恒夫、大塚恭一、友田純一郎、中代富士男、村上忠久、山本幸太郎、小林猷信、足立忠、水町青磁、滋野辰彦、杉山静雄らが、『人情紙風船』に票を入れたが、最高位は板垣の第二位にとどまる。生前はあくまで未完の利器としての扱いだっただのである。

それどころか『人情紙風船』（滋野辰彦「主要日本映画批評」『キネマ旬報』1937年9月11日号）の時評は意外なものだった。



『人情紙風船』ポスター

興行価値——地味な内容と未だ一般的な人気を獲得してゐない前進座主演とから、この映画の当業者間に於ける興行的予想は余り香しくなかつたが、日比谷劇場にワーナー映画「沙漠の朝」と併立されるや予想は外れて、稀有の成績を収めた。思ふに、前進座の映画への努力や山中貞雄の名が漸く大衆の支持を受くるに到つたのであろう。

いってみれば、古い比喩だが、レコードでいうならB面のヒット作が、『人情紙風船』だったのである。反響はむしろ予想外のことだったらしい。

そうして同時代の『キネマ旬報』誌上では『河内山宗俊』も原節子も、さして話題にはならなかつた。歴史は不思議である。すぐれた作品が発表された時代とシンクロするとは限らない。むしろ後世にその価値が(再)発見されることは少なくない。すぐれた作品であればあるほど、それは未来からの贈り物なのだろう。